

症例14 変化のない生活

- ・ N氏 75才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 外来診察室にて、

「Nさん」と話し掛けると、にっこりして「ここはどこかね」とNさんは返事をした。「病院ですよ」と教えると、娘さんを見て「知らなかったよ。学校かと思った」と言った。

「Nさんはいくつになりました？」と聞くと「いくつだったかねえ……いくつだっけ」と娘さんを見た。「75 才でしょ」と娘さんに言われると、こちらを見て「そうだよ、75 才だよ。ところでここはどこかね」と聞いた。

生活歴

Nには娘が3人いる。長女と次女は遠方で生活している。同じ町には三女が住んでいる。Nは10年前に夫を亡くし、以後一人暮らしである。三女は時々母親の様子を見に来る。

Nは、1年前に感冒を患った。以後ほとんど寝たきり状態になった。

【メモ-1】

夫を亡くしてからのNの生活は、ほぼ次の通りである。

朝は、掃除をしてから先祖（仏壇）を拜む。朝食を済ませて庭の掃除。そして洗濯、布団干し。疲れるとテレビの前でお茶を飲み、その後昼食をとる。

午後は、テレビを見ながらお茶を飲み、昼寝を1時間する。洗濯物を取り込むと、おかずを買ってきて夕食の支度をする。夕食をとり、後片付けを終えるとテレビを見て、お茶を飲む。数日に1回は風呂に入る。そして布団を敷いて寝る。

毎日が同じである。

たまには娘が来るが、母親は「これだけのことができるのだから、ボケていない（認知症にはなっていない）」と安心して帰る。

そのような日の夜、Nはわずかではあるが孤独感と不安感に襲われる。

【メモ-2】

Nの生活には一昨日も昨日も、今日も明日も明後日も、変わったことは何もない。カレンダーの予定欄に書き込まれるはずの楽しいこと・嬉しいことや、人に会う予定や約束などは何もない。つまり『未来』がない。カレンダーに記入される出来事もない。したがって、過去もない。『未来』と『過去』のない小さくなった『現在』の日々しかないのである。

これでは、高齢者の誰しにも起こる『普遍性』のある『老化』に、『特殊性』のある『老化』が加わる。認知症の出現時期が早められる『病的な老化』へと移行する。

1年前に風邪を引いたときから、数人の介護者が衰弱したNの生活に参加するようになった。話し相手ができるのである。風邪で寝込んだことが、Nにとっては『幸いなこと』になった。自分のことをときどきは聞いてくれる人ができたからである。しかし、そのような人たちとの会話は『適当な』ものだったようである。Nの認知症は少し進行速度を緩めたものの進行した。

Nに対しての『適当な会話』は、『適切な会話又は対応』にはならなかったのである。

【メモ-3】

一応会話することが出来る状態だと、その人に対して我々の評価は「わかっている」「しっかりしている」となり易い。しかし、「頑張っ！」「勉強しなさい」などはオウムでも言うことができるのである。

認知症高齢者が会話するとき日本語の言葉を失うのは、『重度後期』になってからである。軽度・中度・重度前期では会話は成立しているように思えるのである。

ところで重度前記では、本書での分類では次の通りである。

自宅へ帰れなくなる。トイレの場所をわからない。誰かが関与しなければ、一人では入浴の仕方・洗い方がわからない、衣類を着ることができない などである。この状態を「わかっている」「しっかりしている」とは考えられないのであるが……。

【まとめ】

高齢者にとって、『適当な会話』と『適切な会話』の差は大きい。

この場合『適当』とは、『いい加減で、十分に検討されていない、思いつき』の意味であり、『適切な』は、『良く配慮されていて、明日が楽しみになるような、頑張ろうと思ってしまうような』の意味である。

『適当な対応』と『適切な対応』も同様である。